

遺跡から「聖地」へ  
—インド・ブッダガヤにおける「聖地」再建のダイナミクス—

前島訓子

要 約

本論文の目的は、仏教最大の聖地と称されるブッダガヤ（ボードガヤー）（インド・ビハール州・ガヤー県）を事例に、「聖地」がどのような形で立ち現れ、そして築き上げられていくのかという、「聖地」再建のプロセスの内実を、そのプロセスに関わる内外の力の間に見られる緊張、対立そして妥協からなるダイナミクスを明らかにすることを通じて解明することにある。

「聖地」という地は、近年、グローバル化に伴う国際的関心の高まりと共に、宗教的、政治的、経済的、またはエスニックな利害を異にする諸勢力がぶつかる場となっている。こうした「聖地」をとりまく諸力の関係を読み解くことで、「聖地」のあり方が何によって規定され、どのように形作られているのか、そしてどういった特徴を兼ね備えているのかという一連の疑問に答える。これらの疑問に答えていくことで、各地に特有の形を取りながら現れる「聖地」再建のメカニズムを導き出すことが出来る。こうした観点に立ち、本稿ではブッダガヤの事例を取り上げる。

これまでブッダガヤは、ブッダ悟りの地だという宗教的由来や起源と結びついた歴史的遺跡（大塔：Mahabodhi Temple をはじめとする遺跡）を中心に、国内外から仏教的な関心（歴史的、考古学的、宗教的、観光的関心）を集めてきた。そのために、「仏教聖地」の地域的・社会的文脈（ブッダガヤのヒンドゥー教徒やイスラム教徒が生活するような多宗教的現実に加え、それがゆえに生じてきた宗教的、社会的緊張）に関して、十分に注意が向けられてこなかった。こうした反省を踏まえ、上述の課題に接近するために、現地での資料収集をはじめ、参与観察や聞き取り調査を行った。各章で明らかにしたことは次の通りである。

第1章では、「聖地」や「巡礼」をめぐる先行研究および「場所」という考え方に注目し、「場所」をめぐる研究を検討することによって、「聖地」を読み解く視点を提示した。「聖地」をめぐる研究は、どちらかといえば宗教的関心から「聖地」を切り離してそれ自体として論じることが少なくないことから、「聖地」をそれ自体のあり方や成立をめぐる動態の様相や、多様な緊張とその内実に関わるメカニズムという観点から読み解く研究は稀である。そこで、本稿では、「場所」概念を手がかりにしながら、「聖地」が立ち現れていく動態の様相を「聖地」に関わろうとする諸主体のまなざし・戦略、さらにその社会的条件を探ることに重きをおいた。

第2章では、仏教の歴史を振り返り、13世紀頃にはインドにおいて仏教が姿を消し、仏

教徒にはもちろんのこと歴史的にも長らく忘れられていた地が、なぜ「仏教聖地」として蘇ることとなったのかを、インドにおける他の仏教の地との比較を交え、既存の資料を手掛かりに明らかにした。インドにおける仏教と関連する地は、英領植民地期に仏教的関心が向けられ、考古学的調査及び発掘が進む中で、インド各地においてブッダ縁の地として同定され、史実的な意味を取り戻している。特に、ブッダガヤの場合、西欧での仏教的関心が仏教復興運動（Anagarika Dharmapala の大塔返還運動）の引き金となり、その運動によって歴史的遺跡が宗教的な意味を帯びはじめる。本章では、ブッダガヤが、どういった点で他のインドにおける仏教聖地や仏教遺跡と決定的に異なっているのかを明らかにした。

第3章では、国内外の仏教徒を惹きつける求心的な流れを作り出しているブッダガヤの現状とその流れが築き上げられていくプロセスを明らかにした。具体的には、主に遺跡の周囲において仏教儀礼が執り行われていくプロセスや国内外の仏教寺院建設の展開を取り上げた。そして、これらのプロセスを寺院管理組織の発行する雑誌や各国寺院への聞き取り調査等を手掛かりにしながら、ブッダガヤの「仏教化」の展開過程として検討した。その結果、第一に、英領期の仏教復興運動の展開の中で遺跡が宗教的な意味において争点となったとはいえ、それがすぐにインド内外の仏教徒の関心と注意がブッダガヤに向けられる原因になったわけではない点や、第二に、ブッダガヤが「仏教聖地」としてのゆるぎない地位を確立（＝仏教化）していくのは独立後のことだという点、さらに第三に、そこには新生インド政府の戦略といった地域外的な力の影響を無視しえない点を明らかにした。

第4章では、ブッダガヤが仏教の地としての意味を取り戻し、再び社会的な争点として登場するはるか以前からブッダガヤに築き上げられている Mahant を中心とする社会の変容をブッダガヤの「聖地化」との関係から検討した。中でも、「仏教化」の中でブッダガヤに生じていた仏教改宗や観光地化、他宗教の寺院の再建の動きを、現地での聞き取り調査に基づきながら分析することで、仏教化が地域社会（伝統的社会）と多様な形態をとりながら相互に関係しあっていることを明らかにした。一連の仏教化の影響に対する地域内部の反応として現れていた仏教改宗や観光地化、ヒンドゥー教やイスラム教の宗教施設の再建はそれぞれ中心を担う集団に特徴があり、その集団の特徴はカースト上の相違に表れていた。具体的に言えば、仏教改宗をしたのは不可触民やハリジャン、指定カースト等と称されることもある（本稿では「低カースト」と定義）人々であり、観光業に着手したのは主に「後進カースト」であった。さらに、ヒンドゥー寺院の再建は「高カースト」、イスラム教のモスクの拡大は「イスラム教徒」が担っていた。こうした集団の登場は、いずれも Mahant を中心とした支配体制が揺らぎ、絶対的な権力者であった Mahant との間に築かれていたカーストに根差した関係性が変化したことに要因があった。その結果、明らかにしたことは、第一に、ブッダガヤの「聖地」の再建（＝聖地化）は、仏教徒のみに開かれた排他的な「仏教聖地」の成立を意味するのではないことと、第二に、「聖地化」が、長らくブッダガヤ社会を支配してきた Mahant（ヒンドゥー教のシヴァ派の僧院（Math）の院

長) や Mahant を中心に築き上げられてきた支配体制の変容と分かちがたく結びついているということだ。

第 5 章では、独立以降、新たに登場しつつある様々な集団が「聖地」の再建にどのように関わりつつあるのかを、大塔やその周辺の管理を担う寺院管理組織及びその活動や、その管理体制めぐって生じた新仏教徒の大塔返還運動、さらに遺跡の世界遺産登録(2002 年)に伴うその周囲の開発をめぐる顕在化した反対運動を、現地でのインタビューや文献資料をもとに検討し、それぞれの動きにかかわる当事者たちとそこでの争われている問題の争点を抉り出し、「聖地」再建をめぐる多元化する当事者と争点との関係を明らかにした。その結果、Mahant に代わる地域的主体として登場した集団が、それぞれ異なる運動の中心を担っているということが明らかとなった。具体的に言えば、新仏教徒に対して抗議の声を上げたのは「高カースト」を中心とする集団であり、開発に対する反対運動の中心を担ったのは、「後進カースト」であった。

以上のことを踏まえ、終章では、ブッダガヤに固有な「聖地」のあり方を「聖地化」というプロセスとその中で関係しあう様々な社会的諸主体の関係でとらえ、さらに、「聖地化」を「場所」という考え方から捉えなおした。ブッダガヤはこれまで考古学や仏教学等の領域から、仏教的関心にに基づき取り上げられることが殆どであった。その上、実際、外部の力(仏教徒による運動、新生インド政府、新仏教徒による運動等)によって様々な形で仏教化が推し進められている。

だが、本稿が明らかにしたのは次の点である。第一に、「仏教化」が、多様な宗教的、社会的現実の絡み合いを下敷きにしているということだ。そして、第二に、ブッダガヤにおいて特徴的な社会構造を支え、それを維持していた Mahant 体制の崩壊が、Mahant 自身の仏教化や地域に対する影響力を弱めただけでなく、その後の多元的な地域的主体の登場を促す土壌を作り出し、さらに、第三に、そのような背景から登場してきた諸主体(=当事者)が、Mahant に代わる新たな地域主体としてブッダガヤの「仏教化」に対応・対抗しているということだ。しかも、その新たな地域主体は、Mahant 体制下に埋め込まれていたカーストが、Mahant 支配体制の揺らぎとともに、それぞれ「聖地化」と関わる当事者として集団化していた。その結果、第四に、ブッダガヤにおける「聖地化」は、仏教の純粋な地として築き上げられていくのではなく、依然として「ヒンドゥー教」の要素を認め、妥協を図り、イスラム教にも配慮を覗かせる重層的な「場所」として紡ぎだされつつある。まさに、そこにこそ「聖地」であると同時に絶え間なく「聖地化」しつつあるブッダガヤの現在がある。こうして本博士論文では、ブッダガヤの事例を通して、遺跡の考古学的発見以来、遺跡群が「場所」として争点化されていき、その争点化が当事者化(=主体の形成)を促し、更には新たな「場所」の争点化に結びつく中で「聖地」が築き上げられていくという「聖地化」のプロセス、すなわち場所化と当事者化の相互のスパイラルな関係からなる「聖地」再建のダイナミクスの一端が捉えられたといえよう。